



ホスピタウン便り

発行責任者 ホスピタウン事務局
VOL61 平成23年5月

生きている喜びを形に

今回の東日本大震災は、筆舌に尽くしがたい大災害でした。とにかく、想像を絶するものであり、多数の犠牲者が出ました。今回の震災では家も財産もすべて失い、中には家族も失い、残ったのは自分一人、自分の命だけという方も多かったと思います。

それに比べれば“当面”ではありますが、私たち山陰、米子はどれだけ安全かと、今穏やかに生活できることに感謝しなければなりません。

たしかに、米子も今年の新年は豪雪で、弓ヶ浜半島の松林は無残な形になりました。

それでも今となってみれば、今回の大震災に比べると、「たったこれだけで済んだのだ」とさえ思えるのです。福島県、宮城県の皆さんと比べたら私たちは幸せすぎるぐらい幸せです。

私たちはとかくすると不満が心の中に起きてきますが、物事は考えかた次第です。それどころか、いつもは今ある命があることを当たり前すぎて忘れがちですが、今回の震災を機に、命あることに感謝し、そして有意義な人生にするための決意をするきっかけにできればと思います。

プロゴルファーの石川遼プロ、宮里美香プロが、今季の獲得賞金全額を震災の被災者のために寄付すると勇気ある決断をし、また、ソフトバンク代表取締役の孫正義氏が個人として100億円、および平成23年度から引退までの孫社長の役員報酬全額も、震災で両親を亡くした孤児の支援として“継続的な”支援を宣言しています。この“継続的”支援が本物の支援だと思います。

私たちも100分の一、1000分の一でも“痛みを感じる支援”が必要だと思います。“痛みを感じる支援”であればこそ命があることに感謝も心に刻まれるのです。

そして一方で私たちも、いろいろな災害から自分を守るための備えを常にして、話し合い、訓練しておく必要があると痛感しました。生きている限り、命を大切にし力強く前向きに生きて行かなければなりません。素晴らしい春の空気を一杯吸って一步一步前に、そして上に向かって歩みましょう。

私たちは幸いに今年も素晴らしい桜を見ることができました。これからまた一年間歯を食いしばってがんばって生きて、来年も幸せな気持ちで満開の桜が見れますように。



社会福祉法人 真誠会
医療法人 真誠会
理事長 小田 貢

新規事業計画について 米子中央ホスピタウン 第2ローズガーデン着工!!



社会福祉法人 真誠会
理事長 小田 貢

米子市西福原の福米西小学校の隣地に第2ローズガーデンが本年4月下旬頃より着工することになりました。

第2ローズガーデンは、富士見町のローズガーデンの大型版を想像していただけでもよいと思います。

現在の計画では、リハビリ強化型通所デイサービス（定員40人）、介護予防センター（定員30人）、認知症対応型デイサービス（定員12人）、包括ケアセンター、訪問リハビリテーションセンター、訪問看護、訪問介護、居宅介護支援事業所などを作る予定です。

富士見町のローズガーデンはとてもおしゃれで開所時より爆発的な人気でしたが、第2ローズガーデンは、そこに劣らない魅力のある設備で、この地域の福祉サービスの中心であり、町おこしの中心になると思います。

完成は8月下旬頃で、9月頃から開所の予定です。

リハビリ強化型デイサービスです。



4月30日は地鎮祭が執り行われました。
新たな決意をもって開所に向けてがんばります!

市民フォーラム 第2回 認知症サミット鳥取

8月21日開催!!

認知症患者の数は現在200万人と言われていています。そして2035年には2.2倍の445万人になると推計されています。

このたび、鳥取大学医学部保健学科 生体制御学講座環境保健学分野 浦上克哉先生、鳥取短期大学 学長 山田修平先生、NPO 法人がいなネットを中心に、各種団体の横断的な市民フォーラム形式の意見交換の場を企画しました。主催団体として「第2回認知症サミット鳥取」実行委員会を立ち上げ、8月21日（日）に、倉吉市の新日本海新聞社中部支部本社で「市民フォーラム 第2回認知症サミット鳥取」を開催します。

鳥取県内各地に「安心して安全に暮らせるまちづくり」を進めるための取り組みがありますが、高齢者虐待、孤独死、老老介護、認知介護など、さまざまな地域課題を解決するために住民・地域・専門職・行政等のネットワークによって活動を進める「仕組み」が求められています。

住み慣れた地域で誰もが安心して生活できるような、地域全体で支える「仕組み」のあり方と課題を探るために、県内の各地区のリーダーから、地域の助け合い活動報告の発表をしていただきます。

また、東日本大震災により被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、認知症災害弱者に対する支援体制についても考えていきます。

入場は無料で、どなたでも参加いただけます。ディスカッションでは、アンサーパッドという機械を使用し、会場の方々にも意見交換に参加していただくことができます。皆様のご参加をお待ちしています。

また、東日本大震災により被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、認知症災害弱者に対する支援体制についても考えていきます。

市民フォーラム 第2回認知症サミット鳥取

日時	平成23年8月21日(日) 12:50～16:00
会場	新日本海新聞社中部本社 (倉吉市上井町1丁目156番地)
参加料	無料



平成23年度 新入職員入社式

本日入職された皆さん、おめでとうございます。全国的に大震災などで大変な時期に、平穏無事にこの日を迎えられたことは、恵まれたことだと感謝しなくてはなりません。真誠会は今年で創立 23 年目になりますが、入社式は今まで 9 割以上が晴天で、本日も、式にふさわしい素晴らしい天気となっています。

新人の皆さんは今、それぞれどういう気持ちを胸に抱いていらっしゃるでしょうか。本日は皆さんの人生の中でも大きな区切りの日です。それは、自分の力で食べていくという記念すべき第一歩だからです。これまでは、両親や社会から与えられる中で育ってきたのが、これからは、自分の力で得ていかなくてはならなくなるのです。人様に世話になるのではなく、人のために働くことになるのです。分かりやすく言えば「愛情を受ける立場から、愛情をあげる立場になるということ」です。

皆さんは、まずは、医療・介護の分野での本職に一生懸命に取り組むことから始めてください。大変な仕事です。しかしながら、これほど素晴らしい仕事はありません。人間は、人の世話にならずに人生を終えることはできません。その中には生活支援、介護、リハビリなどでお手伝いして差し上げるプロセスもありますが、個人の人間性を大切にしながら人生を全うするところをお手伝いするというのが、皆さんのこれからの仕事です。世間では医療、介護は大変だといわれていますがこれ程素晴らしい仕事はないと思います。

また、人間的にはこの機会に一気に大きく大人になって、自分を変えていただきたいと思います。「自分には謙虚さを、人には愛を」というのが真誠会の理念ですが、自分が未熟であることを死ぬまで自覚して勉強し続けてください。

皆さんには、ぜひ、今の「がんばろう」という気持ち、初心を忘れないでいただきたいと思います。なぜ真誠会を選んだのかという動機、決心を忘れずに、仕事に取り組んでいただきたいと思えます。皆さんは若いです。時間がたっぷりあります。たっぷり勉強して医療法人・社会福祉法人真誠会の立派なスタッフとして、そして、社会人として立派な人間として成長していただきたいと期待します。



「井の中の蛙、大海を知るの観」～就任の挨拶～

この度、看護・介護統括部長を拝命致しました三ツ木育子です。急性期医療の現場で 40 年近く、看護師として看護実践と管理を行って参りました。

就任して 10 日余り、新採用者と共に入職時オリエンテーション研修を終えたばかりです。医療法人・社会福祉法人真誠会が、担っている医療・福祉・介護の質と量の広さ、深さに驚愕しているところです。正に「井の中の蛙大海を知らず」ならぬ大海を知るの境地であります。

オリエンテーション研修でご指導頂いた全ての職員の方々が、異口同音に話される真誠会の理念「愛と謙虚さ」を持って、地域の皆さんと共に安心して暮らせる街づくりに貢献していく活動は、私にとりましては、介護・福祉の分野は未経験ではありますが、新しい挑戦として、期待と喜びで一杯です。

未経験ではありますが 2 年ほど前から、一利用者の家族として提供されるサービスを受けて参りました。セントラルクリニック、ゆうとぴあ、訪問看護・介護等々、沢山の方々に支えて頂きました。どの場面においても笑顔で利用者の声に耳を傾ける職員の誠実な姿勢は、この理念に基づいているのだと理解しました。同じ医療人として学ぶことが多々ありました。この方々の仲間に加えていただくことが、現在の私の期待と喜びをさらに大きくしています。

急性期医療の現場で今まで培ってきた、命の尊さと人権の尊重(倫理的配慮)を看護観とし、沢山の方々のご指導を受け、真誠会で責務を果たしていきたいと思えます。どうぞよろしくお願い致します。



医療法人・社会福祉法人 真誠会
看護・介護統括部長
三ツ木育子



～介護福祉士など多数合格～

介護保険に携わる仕事の中には、多種多様の資格があります。「ケアマネジャー」「介護福祉士」「認知症ケア専門士」等。これらの資格取得に向けて、真誠会ではバックアップ体制として、受験対策チームがあります。

有資格者が主となりチームを作り、受験者へ受験のポイントや模擬試験を行うなどの支援をしています。その支援体制のお陰で平成 22 年度の各専門職の合格率は非常に高いものでした。

資格名	合格者数
社会福祉士	1名
介護福祉士	9名
介護支援専門員	6名
認知症ケア専門士	4名
看護師	2名

この結果、平成 23 年 4 月現在の医療法人真誠会、社会福祉法人真誠会での合計の専門職の人数は以下のとおりです。

社会福祉士	25名
介護福祉士	134名
介護支援専門員	53名
認知症ケア専門士	38名
理学療法士・OT・ST 他	27名
看護師	31名
准看護師	25名
医療・社福全職員	415名

自らが学び、資格取得をすることで、介護専門職としてさらなるステップアップができます。日常の業務の中で資格取得への努力を怠らず、学んだことを利用者様へのケアへ繋げています。

今後も真誠会は無資格者ゼロ、人材育成の真誠会、教育の真誠会を目指して指導を強化していきたいと思えます。

「希望・熱い思い」

～真誠会通所リハビリテーションに浴室 新築

通所リハビリテーション真誠会は、平成 9 年に開設されました。当初は、20 名程度の方が利用されていましたが、入浴に関して需要は少なく、ゆうとぴあの施設を利用し入浴サービスを行っていました。

ゆうとぴあ入浴を要望される方は年々増加し、ゆうとぴあの施設を利用した入浴に限界を感じておりました。入浴される方に「ほっとした、やすらぎのひと時」を提供したいと考えましたが、問題が大きく実現は大変困難な状況にありました。

14 年目にして、夢は実現しました。新築された浴室は、家庭の状況に近い形になっており、少人数での入浴提供となっています。リハビリテーション施設としての機能も備え、どのような困難な状況の方にも入浴を提供できます。

浴室までの小さな渡り廊下の正面からは、4 月には桜の木がきれいな花を咲かせているのを見ることができます。



入浴されるお一人おひとりのかたへ、職員・真誠会の熱い思いが伝わる肌理細やかな入浴サービスを行っております。

真誠会に来られましたら、是非お立ち寄り下さい。



通所リハビリテーション真誠会
看護師長 佐平登志美

地域の皆様の安全安心な生活・健康維持を目指して



リハビリテーション課
理学療法士 課長
大西 博巳

医療法人真誠会リハビリテーション課に今年新たに理学療法士 2 名・柔道整復師 1 名・健康運動指導士 1 名が加わり、総勢 27 名（理学療法士 10 名・作業療法士 7 名・言語聴覚士 2 名・健康運動指導士・介護福祉士・柔道整復師合わせて 8 名）となりました。

このリハビリテーション課の今年の目標は、「安全安心な生活を支援する」です。その為に老人保健施設入所部門・通所部門・訪問部門・予防部門に専門職を配置して、多職種協働でご利用者様の生活が安全に安心して過ごすことが出来るように特に生活リハビリを重視していきます。また、地域支援の一環として「地域の皆様が運動習慣を身につけ、より健康を維持できる」を目標に、健康クラブを実施しております。健康クラブでの運動以外にも地域公民館などでの運動教室にも力を入れており、ノルディックウォーキング教室も実施しております。皆さん一緒に運動をしましょう。



リハビリテーション課職員一同、日々研鑽をして専門職としてのスキルアップを図りより充実した支援が出来るよう努めていきますので、宜しくお願いいたします。

介護の“食”について

困っていることは
ありませんか？

“食べること”は人間の当たり前の行為なのに実はとても難しい… そう思いませんか？「太るのも痩せるのも食事が基本」と分かっているけど、長年の食習慣はなかなか変えられないですね。また、介護の中での“食”についても様々な悩みの声を聞きます。食事の介助にすごく時間がかかってしまう。何か最近食欲がない様子だけど、どうしたらいいのか…。水分をなかなかとってくれない。食事中ムせてしまって食べられなくなる。血糖値が安定しない。など… ちょっとしたことでも、どこに相談していいかわからないことってありませんか？

真誠会の栄養課には 5 名の管理栄養士が勤務しています。外来での栄養相談はもちろん、入所施設、通所施設での栄養相談にも気軽に応じています。また、必要があれば、主治医の指示をいただき在宅へ訪問しお話しさせていただくこともできます。今までのご相談の中で、介護食の調理指導や、介護食品、栄養補助食品のご紹介もさせていただきます。

通所のスタッフやケアマネージャーさんを通して、お気軽に声をかけてください。

真誠会では現在、介護食の取り組みとして「ムース食」を提供しています。

高齢になると、噛む力・飲み込む力が低下してくることで、硬いものが食べにくくなってきます。その対応として、料理を刻んだりミキサーにかけたりなどして食事を摂られる方も少なくありません。「もっと食事を目で見て楽しんでいただきたい」という想いから、舌でつぶれる硬さの形ある食事を提供する取り組みをしています。



真誠会セントラルクリニック
管理栄養士 係長
伊藤 朋子



▲柔らかい白身魚のムース。
にんじんとエンドウのムース
を付け合わせにしています。

▲野菜そぼろあん
かけの肉じゃがを
食べやすい大きさで
お出ししています。



辻田耳鼻咽喉科



辻田耳鼻咽喉科
院長 辻田 哲朗



震災時の医療支援

3月11日に起こった東日本大震災を境にして、日本という国が一変してしまいました。震災で亡くなられた人々の事を思うと、自分は生きているのではなく、たまたま生かされているだけなのだ実感します。それだけに尚更、震災の被害に遭われた人たちのために何かしたい、けれども何もしてあげられない、そんな自分をもどかしく思っていました。

あまりニュースにはなってはいませんが、日本医師会では震災直後より各都道府県医師会にボランティアの医療支援を要請しました。これを受けて全国から続々と被災地に医療ボランティアが集まり、4月中旬現在で全ての都道府県から延べにして約 600 チームが入れ換わりしながら被災地の医療支援を行っています。チームの構成は医師、看護師、薬剤師、事務、放射線技師、介護福祉士など様々です。当然ボランティアですから自己完結型で、水、食料、寝袋持参です。往復の旅費は支給されますが、それ以外は自己負担となります。鳥取県でも医療ボランティアを募ったところ続々と応募があって3月後半から活動が始まり、現在でもそのラインが絶えることなく繋がっています。

ボクの医院にもボランティアの要請がありましたが、医療事務が必要だとの内容でした。医師でも看護師でもなく、医療事務というのに戸惑いました。派遣から帰って来た人に聞くと、「現地では医師や看護師はもちろん必要だが、来られた患者さんへの応対、問診、カルテの整理に事務の存在が欠かせない」とのことです。そこで職員に話したところ即座に「行かせて下さい。」との返事が返って来て、少しうるっとしました。写真は出発前の米子空港でのものです。右が事務職員で、あとの2名は米子の開業医の先生方です。これと鳥取からの3名と合流して計6名のチームで宮城県・石巻市へと向かいました。鳥取県の担当は主にこの石巻市と隣の女川町です。ここは被害が甚大なため、他からも多くの医療チームが派遣されています。



本人が帰ってきて聞いてみると、当地でのボランティア活動はとても充実していたらしく、避難所での仕事はかなり忙しかったようです。要請があればまた行きたいとも言っています。医療事務の仕事が必要とされ、被災地の復興のために少しでも役に立てたという充実感があったようです。

医療ボランティアに行かれた人たちに聞いたことですが、当地の受入れ側では全国からやってくるたくさんの方々の医療チームをまとめて、それを無駄なく各地域の避難所に配置し、しかもその機能が日々刻々と変化してバージョンアップしていたとのことでした。また鳥取県医師会事務局の皆さんが食料支援、情報の伝達等を絶えず行ってバックアップしてくれています。こうした活動には色んな方面の力を結集した総合力が必要だと改めて認識しました。情報の収集、後方支援、組織をまとめるリーダーの存在などなど……。まるで戦争時の軍隊の行動と同じです。

現地に赴くスタッフだけでなく多くの人たちが関わって初めて医療支援というボランティア活動が成り立つのを知って、これからは後方部隊としてやればボクでも被災地の人たちの役に立つことができます。復興はこれからが本番です。息の長い支援を続けて行きたいと思います。



いえはら歯科



2011 年 春

いえはら歯科

院長 家原 猛

このたびの東日本大震災で無念にも亡くなられた方、大切な人を亡くされた方、未だ大切な人の行方の分からない方など多くの被災された方々に、心から哀悼とお見舞いを申し上げます。

想像を遥かに超える規模で発生したプレート境界型地震によって惹き起こされた大津波の猛威、凄まじさは、これまで見た事もない映像によって、その被害の甚大さと悲惨さと共に、衝撃的に伝えられました。奇跡的に救われた命の裏で、多くの命が大きな波にのまれていきました。三陸の豊かな自然に育まれた人々の生活は瞬時のうちに悉く破壊されました。こんなことが起こるのか。思わずこんな言葉が出てしまいました。自然の前に人の営みがこんなにも無力か、これまでこんなスケールで感じたことはありませんでした。

早速全国から、全世界から救助、救済、復興支援の声が、行動が巻き起こりました。阪神大震災等の経験が活かされ、時間の経過と共にどういったものが必要か、どういった援助が必要か、現地の方々の声に耳を傾けながら計画的に提供されることを願いたい。如何せん被害が広域で避難所、被災者の数が極めて多いことが心配される所です。また、将来的未来的に発展・先見性のある復興計画、町づくり計画であってほしいと思う一方、その土地の気候・風土、文化・風習・伝統などを大事に、現地の人々の立ち上がる気概を支え、人々の暮らしを支える生業（なりわい）が元気を取り戻して欲しい。三陸の魚介類は本当に美味しいから、カキを始め漁業・水産業が元気に復活して欲しいと願うばかりです。

福島第1原子力発電所の事故も明確な解決工程も見えぬまま、長期の対応が必至の状態です。もはや全世界の問題となっています。今後、国のエネルギー政策の大きな転換点、或いは見直しの材料となることは間違いないと思われます。

ここ山陰にも少し遅い桜の季節がやってきました。これまでの災害想定を大きく上回った今回の震災は、日本人の心を1つにします。きっとこれまでの日本とは違った（いや、これまで培ってきた）連帯の輪を、結束を、つなぐ力を発揮します。そして、また日の出る国の人々は豊かな自然の中で、確りと元気に立ち治るに違いない。春爛漫の桜を眺め、そう感じたのは私だけではないはず。つながろう！日本。がんばろう！日本。

「医療法人・社会福祉法人真誠会」「NPO 法人がいなネット」 米子市公会堂改修へ 30 万円を寄附

4月7日に、医療法人・社会福祉法人真誠会とNPO 法人がいなネットは、米子市公会堂の改修に役立てて欲しいと計30万円を市に寄附を行いました。小田理事長が職員や会員に募金を呼び掛けていたもので、米子市役所 野坂康夫市長を 訪ね目録を手渡しました。

小田理事長はかねてより公会堂の保存に積極的な考えを持っていました。

それは公会堂は **1) 建築遺産である 2) 米子のランドマークであり東京の日本橋のようなものである 3) 米子の文化が生まれ育った文化の聖地である 4) 50 年前の米子市民の団結と文化に対する意欲の象徴である**ことをあげております。

小田理事長は、「米子市民の手で建てられた公会堂の修復に関しては、再び米子市民の団結と文化に対する熱意が結集されるべき。東北の皆さんがこの大震災の中で力強く立ち上がる努力からすれば、私たち米子市民が公会堂保存に協力することはどれだけの苦勞があるのでしょうか」と述べました。今後も継続的に募金活動をしたいと思います。



ふる里ギャラリーに可愛いお客さんが来館

和田町の小規模多機能センター「ふる里」に隣接して「ふる里ギャラリー」が出来て5ヶ月が経つ。地元や周辺の方々の自慢の作品を展示して和田から文化の情報発信が出来ればと願っている。作品展は既に5回目を迎え、3月現在、地元の故安田富穂先生(和田小学校教諭)の油絵を中心にご家族の作品を合わせて「一家展 大きな絵・ちいさなむし」展を開催中である。



小規模多機能センター「ふる里」
運営協議会
(和田地区自治連合会会長)
田邊 忠雄

3月9日、春だというのに北風と小雪がちらつく悪天候の中、ギャラリーは可愛いお客さんで賑わった。和田保育園の矢倉先生、森井先生に引率されて年長組、年中組あわせて26名の園児たちである。

「こんにちは〜!」館内一杯に響き渡る元気な声、早速説明を始めようとしたが子どもたちの心ここに有らず。一目散に標本の昆虫に群がったのである。「おじさ〜ん!このむしのなまえは?」「このむしどこでとったの?」の連呼である。いやいや・・・まいりました!

やはり子どもたちの興味といえば・・・“絵よりも虫ですよね!”



中海テレビ放送 「第15回パブリック・アクセス・チャンネル大賞」 がいなネット制作番組「和田でワタ作り」が 地域文化賞を受賞



3月26日、中海テレビ放送が選考表彰するパブリックアクセスチャンネル大賞で、「地域文化賞」を受賞しました。

これは中海テレビのチャンネルの一つで市民が撮影し放映された作品(年間120本ぐらい)から優秀な作品を表彰するいわゆる“中海テレビのアカデミー賞”です。

今回は地域文化賞ということでしたが、和田でワタづくりという企画が評価されたようです。授賞式のインタビューでNPO法人がいなネット小田理事長は、「ワタ作りはワタ作りが目的ではなく、最終的にはワタ作りを通して地域が昔のような人情で結ばれた社会を再構築して、災害にも、認知症にも、独居老人にも強い絆で結ばれた社会を構築することです」とコメントしておりました。



自動車のシートベルトの着用と 車いすの身体拘束はどこに違いが

老人保健施設 の日常

平成 23 年の正月は、年末からの記録的な大雪で外出できず、テレビの正月特番にも飽きたので、マイケル・サンデルの「ハーバード白熱教室」を興味深く見ました。政治哲学という堅い分野にもかかわらず、実例や仮想的な例を挙げての対話型講義で視聴者をひきつけて飽きさせません。介護の現場でも、表題のような事例が脳裏に思い浮かびました。

自動車の運転時にはシートベルトの装着が義務付けられており、違反すれば反則金が科されます。要介護高齢者の車いすの場合には、身体拘束の禁止規定があり、利用者の保護のため緊急の場合を除き施行できません。両者の判断の違いは何によるのでしょうか？

私たちは、3.11 の東日本大震災のように将来何が起きるかを現在の時点で確実に知ることができないと言う、不確実性とリスクの下で生活しています。たとえば明日、交通事故に遭うかも知れず、多くの人にとって事故に遭う確率は小さくてもゼロではありません。保険市場はリスクを回避しようとするために設けられた制度です。自動車保険を掛けた人が、保険があるため乱暴な運転となり、事故件数が増加し、結果として保険掛け金の増加を招き、保険制度の破綻に至るといふ、モラルハザードが起こりかねません。シートベルト着用法の背景には、強制加入の国民年金制度や自賠責保険などの様に、パターンリズム的な“人の後悔”や“過ち”を前提にしたお節な規制や制度が見て取れますが、保険制度の維持には有利に作用します。

車いす身体拘束の対応は、宝くじの購入に見られるように、当たる確率が低い夢(不確実性)のような、リスクを買っているともいえます。リスクに対する態度は、宝くじと同様に車いすの場合は家族や他者であり、本人の被害額が少なければ利益と損失が同等の場合には質的な差や違いなどは過少評価されます。宝くじでは購入金より当選金の払い戻しが行われますが、車いすの場合には介護保険料は自治体に入り、施設は積立金の原資がなく事故のリスクのみ負担していると言えます。

車いす身体拘束の対応では、ずり落ち防止の抑制帯を外すには、高齢者の障害度に合わせた良好な坐位保持仕様の車いすが必要です。高齢者の病状は変動するのでリースが望ましいのですが、老健では不許可です。介護職員も常時見守りは人員的に無理であり、施設側とご家族の協力で車いすの有効活用にて対処しています。



介護老人保健施設
ゆうとぴあ

施設長 中下英之助

DARAZ FM の新番組

「ドクター小田の耳から入るビタミン剤」 4月9日(土) スタート


DARAZ FM
79.8MHz

今年の4月より、DARAZ FM (平成 22 年6月に開局したコミュニティ FM 放送局 周波数：79.8MHz) で毎週土曜日朝7時30分から8時までの30分番組「ドクター小田の耳から入るビタミン剤」という番組が始まりました。

小田理事長は忙しいのでこの番組への出演は迷ったようですが、医療福祉だけではなく、地域の活性化、精神文化の発展のために少しでもお役に立てることがあるかもしれないと思い出演を判断したそうです。

この番組ではタイトル曲も小田理事長が選んだ「メイド オブ オリンズ」で始まり、そして最後は毎回小田理事長が選んだプレゼント曲が流される趣向です。

一週間のうちには再放送もあります。土曜日の朝は誰も朝起きるのが遅いかもしれませんが、早起きの方は一度 DARAZ FM の「耳から入るビタミン剤」をお聴きください。



西部地区医療連携協議会シンポジウム

がんの終末期医療を考える～事例から学ぶ～

平成 23 年 3 月 17 日、鳥取大学医学部附属病院において、鳥取県西部地区医療連携協議会が開催されました。

『がんの終末期医療を考える』と題して、家族、医者、訪問看護、ケアマネジャーの立場からの発表とディスカッションが行われました。

私は、ケアマネジャーの立場からパネリストとして参加しました。その時に感じたことをお伝えできればと思います。

人はいつか死を迎えます。人は一人でこの世に生まれ、一人で死に逝くと言われてい

ます。しかし、この世に生を受けた時も、死に逝く時も、誰かの支えがあります。二人に一人はがんにになると言われている時代に、がんの告知を受けて、死に逝くまでどのような生活を送るのか。ご家族も含め、どう添っていくのか、とても不安で心配を抱えることとなります。

病院での看とりがいけないことで、住み慣れた自宅で最期を迎えることがよいという風潮があるように感じることがあります。私自身も、病院で最期を過ごされることが、ご本人やご家族にとって、不幸な状況になっているのではないかと思う時がありました。しかし、いつまで続くか分からない状況で、添う家族、添われる本人も辛くなるのも事実です。

そんな時に、自宅で過ごしたり、病院で過ごしたりできることで、ご本人、ご家族の望みや想いを叶えることができるのではないのでしょうか。

「こんな気持ちで過ごしたい」「新緑の空気を吸いたい」そんな想いを汲み取りながら、最期の時を過ごしていただける真誠会セントラルクリニックであり、ご本人、ご家族へ添えるソーシャルワーカーであり続けたいと思いました。



真誠会医療福祉連携センター
センター長
小山 雅美

「あなたは、最期の時を、どう過ごしたいですか？ 家族の最期を、どう看取りたいですか？」

鳥取県西部地区医療連携協議会「がんの終末期医療を考える～事例から学ぶ～」というシンポジウムが3月に鳥取大学で開催されました。このシンポジウムでは、がんの終末期医療を地域でどのように連携してサポートしていくのかという事について、西部地区の病院・訪問看護・開業医・ケアマネジャーの方々がそれぞれの立場で実際に経験した事例を基に報告・意見交換が行われました。

皆さんは、がんで治る見込みがなく死期が迫っていると告げられた場合、どこで、どのように過ごし、最期の時を迎えたいですか？

ある調査によると、83%の患者様は自宅で過ごすことを希望されています。

しかし、米子保健所管内のがんによる死亡者約 700 人のうち、40 名程度の方しか、自宅で看取られていないのが現状で、多くの方が病院で死亡されています(平成 21 年度)。

「自宅でゆっくり、気兼ねなしに最期の時を過ごしたい」と本人・家族が願われていても、家庭での受け入れができる体制・心構えがなければ、難しいのが現実なのだと思えます。

でも、個々の状況に応じた細やかなサポート体制を作ることで、個々の望みに応じた過ごし方をする事は、不可能なことではありません。

患者様の体調は刻々と変化してゆきます。在宅チームと医療チームがタイムリーに柔軟に状況変化に対応できるかどうか、サポートする側に求められると思えます。

真誠会でも、がんの末期患者様の入院が増えていますが、大病院にはない自由度・臨機応変な体制で患者様・家族のサポートが出来るように取り組んでいます。

状態が悪い時期には、入院により栄養状態の改善や疼痛緩和などを含めた医療を受け、体調が良い時には一時外出・帰宅・退院、在宅に戻った時には訪問看護師やホームヘルパーによる医療・看護・介護の支援を受けることが可能です。

何人もの方の経験を通して、本人も家族も思い残すことのない最期は、必ずしも悲しいばかりのものではなく、家族も微笑みながら送り出せる場合もあるのだということ、学ばせていただきました。

患者様・家族の望まれるより良いサポートを提供するためには、地域連携の強化・参画を推進していくことが重要だと、医療スタッフの一員として痛感しています。

「死」を考えることは、「最期までどう生きるか」を考えることではないかと思えます。「あなたは、最期の時を、どう過ごしたいですか？家族の最期を、どう看取りたいですか？」



真誠会セントラルクリニック
薬剤科
科長 木村 幸美



セイエル米子支店 クロスワイズセミナー

小田院長講演会 「地域医療と認知症」

3月17日(木) 19時より株式会社セイエル米子営業所の会議室で開催されたクロスワイズセミナーにて、小田院長が講演しました。

今回新しい認知症の薬の販売に当たって、販売会社のスタッフに対して「地域医療と認知症」と題して講演をしました。

小田院長の講演の主旨は以下の通りです。

1. 認知症の正しい理解をし、また認知症の患者さんとご家族の質の高い生活、人生を願って新しい薬を販売する
2. どんな新しい薬でも万能ではないのでその限界を知りながら、なおかつその薬の正しい評価が得られるように誠意をもった販売をする
3. 薬を販売するスタッフも長い目でみれば、決して認知症と無関係ではなく、いつかは自分たちも認知症に関して当事者になる可能性も考えると自ずと認知症に対して真剣に考えることができること
4. 認知症は薬だけで治るものではなく、人の愛情が必要であり、地域全体の協力、見守りがあってこそ認知症の患者さんも質の高い人生を送ることが出来るのであって、薬で認知症の患者さんの全人的な改善ができるわけでないこと



真誠会ではこのように、認知症に関する薬を販売している会社のスタッフへの講演だけでなく、毎年、製薬会社のスタッフの現場での認知症の研修を受け入れています。今年はさらに新しい製薬会社からの認知症に関する現場実習の申し込みを受けています。

製薬会社の姿勢もずいぶん良い方向に変わってきているように思われます。



富益しあわせ
デイサービス

グループホーム
青松庵

小規模多機能センター
ふる里

3 施設合同桜まつり

4月7日、8日の両日、富益しあわせデイサービス、グループホーム青松庵、小規模多機能センターふる里の3施設合同桜まつりを開催しました。今年も100名以上の方が参加され、満開の桜の下、お弁当に舌鼓を打ち、歌や踊りを楽しんで、あっという間の2時間でした。参加された方は「遠くに行かなくても、こんな見事な桜を毎年見ることができて本当に幸せです」と思わず顔をほころばせておられました。東日本大震災義援金バザーにもたくさんご協力いただきました。



グループホーム青松庵
管理者 安田 博子



桜を見ながらおいしいお弁当をいただきました。

社会福祉協議会 富益地区
会長 古藤様による南京玉
すだれのパフォーマンスに
会場が沸きました。



地域ボランティアの方々によるコーラス隊。いつも施設の行事で優しい歌声を響かせてくださいます。

**私のベストショット
写真展開催
小田 貢**



私は帆船が大好きだ。
横浜に行ったときにたまたま横浜開港 200 年記念で、帆船が来ていたので無我夢中になって写真を写した。夕方から写し始めて、約 2 時間ぐらい写していたら、気がついた時にはまわりは殆ど暗くなっていた。
しかし私のカメラは暗闇の帆船をきれいに映し出してくれた。暗い夜の空が、インジゴブルーに写せたのが嬉しかった。
気がついたら 50 枚以上写していた。一枚しか展示できないのが残念だった。



菖蒲園に花が咲いたと聞いたので一度菖蒲を写してみたいと思ってチャレンジした。
夕日に照らされている菖蒲を写したが、菖蒲を魅力的に写すのは難しかった。
機会があれば、もう少し幻想的に写してみたい。



私は桜が好きだ！
桜を見ると胸がときめきはじめる。
千鳥ヶ淵の染井吉野はすばらしかった。
桜の谷間から見えるお堀では、若者がボートに乗って楽しんでいた。
桜の季節には私の心は 20 歳も 30 歳も若返る。
「写真のテーマは一つだけ」と神様に言われたら、迷い無く「桜」と答える。

加茂公民館 1 階のロビーにて、4 月 11 日（月）～ 22 日（金）の間、小田理事長の写真 13 点が展示され、地域の方々の目を楽しませました。鑑賞いただいた方に、好きな写真を 1 点選んで投票していただき、展示終了後に、ポストカードに印刷してお渡ししました。たくさんのご来場ありがとうございました。



赤坂プリンスホテルから写した東京の夜景である。
あえて高速道路が黄金に輝くほどに表現して、眠らない東京を表現した。
主役はあくまでも高速道路だ。
ちなみにこの時も東京は殆ど真っ暗であり、カメラで写したからこそ、それぞれのビルが見える、カメラの魔法だ。
このホテルも 3 月で閉館したのでもうこのような写真を撮ることは永久に出来なくなった。



牡丹の花はきれいだ。
この写真は実際には寒牡丹ではないが、普通の牡丹を寒牡丹風に演出してあり感動した。



カメラを持って淀江の公園を歩いていたが、写したくなるようなきれいな花は無かった。そのとき虫が飛んできて野草に止まったのでいたずら半分思いっきりアップで写したら、普段は気がつかない意外にきれいな世界を垣間見ることが出来た。